

## 価値的判断力を育てる6年歴史学習 ～立場討論を用いた交流活動を通して～

### 要約

現代社会は社会的な価値が多様化した「価値多元化社会」である。個人が尊重されることで価値観が多様化し、明確な判断の基準も乏しくなっている。このような社会に生きていく児童には、物事の本質や価値を考える力を養い、物事を公正に判断する力が必要である。また、社会科の学習指導要領では、我が国の歴史や文化を大切にし、日本人としての自覚をもつようにするとともに、持続可能な社会の実現など、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視している。

本学級の児童においては、過去の歴史的事実の価値を判断する際、複数の資料をもとに自分の考えをつくることができる児童がいる一方で、一つの資料からの考え、もしくは判断基準が明確でない考えをつくる児童も複数いた。このことから、児童の中には、価値的判断を苦手とする子が少なくないということがわかった。

そこで、6年生の歴史学習を通して、児童の価値的判断力を育てることを目指し、研究主題とした。また、立場討論で友達と考えを伝え合ったり、議論したりしながら考えを比較・付加修正し、深めていくことができるようにするという点を重視し、副主題を設定した。そして、次のような具体的方策のもと研究を進めていくことにした。

- (1) 教材化の工夫・・・児童の興味・関心・意欲を喚起しやすくするとともに、社会的事象の仕組みや事実間のつながり、働きについてとらえやすく、活発に意見交流しやすい教材にするため、「本質性」「多面性」「関与性」の視点から教材化を工夫していく。
- (2) 単元構成の工夫・・・児童の認識の過程に沿って効果的に価値的判断を行わせていくため、単元内の問題解決の過程を4段階で構成する。
- (3) 交流活動における支援の工夫・・・立場討論を用いた交流活動を活性化させるため、①形態、②交流場面、③個に応じた支援の工夫を行っていく。

実践の結果、次のような成果(○)と課題(●)を得た。

- 本質性・多面性・関与性の視点から教材化を行ったことで、進んで資料を収集・選択して調べたり、意欲的に課題解決しようとしたりする児童の姿が見られた。
- 単元の中で効果的なタイミングで価値的判断を迫る場面を設定したり、個に応じて複数の各種資料を提示したりするなどの支援を行ったことで、自分の考えに根拠をもたせることができた。
- 立場討論を用いた交流活動で、小グループによる事前の考えづくりや話し合い、討論後の振り返りなどを繰り返し行ったことで、自分の考えを付加・修正したり、自分なりの価値付けができるようになったりした児童が多かった。小グループでの話し合いは、自分なりの価値付けの力を高める上で有効であったといえる。
- 討論中の質問・意見のしかた、返答のしかた(討論の流れの工夫・モデルの提示)
- 自分の力で価値付けできる能力の育成(繰り返し価値付けする場の提供)

**キーワード**：価値的判断 立場討論 交流活動における支援の工夫

## 1 主題設定の理由

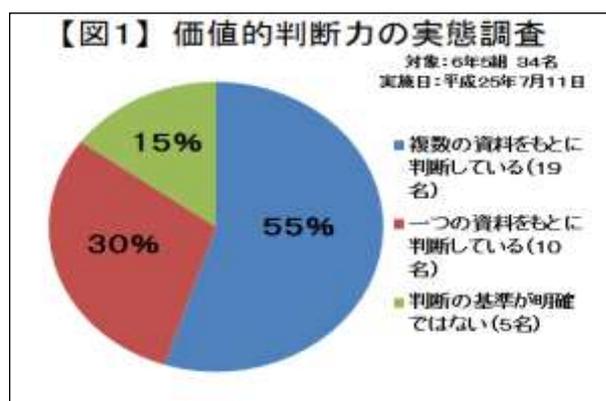
### (1) 現代社会の要請から

社会科の学習指導要領の基本方針では、児童が社会的事象に関心をもって進んでかわり、児童の発達の段階に応じて、それらの意味や働きを多面的・多角的に考え、公正に判断することができるようにするとともに、児童一人一人に社会的な見方や考え方が次第に養われるようにすることを一層求めている。その背景には、現代社会が社会的な価値が多様化した「価値多元化社会」であることが挙げられる。個人が尊重されることで価値観が多様化し、明確な判断の基準も乏しくなっている。このような社会に生きていく児童には、物事の本質や価値を考える力を養い、物事を公正に判断する力が必要である。また、社会科の学習指導要領では、我が国の歴史や文化を大切に、日本人としての自覚をもつようにするとともに、持続可能な社会の実現など、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視している。過去に起こった様々な歴史的事実の本質やその価値を多面的・多角的にとらえ、これからの社会をどのように形成していくかを考えることは、現代の児童に必要な営みである。

よって、社会科の歴史学習において、過去の社会的事象の価値を自分なりに判断する子どもを育てていこうとする本研究は、社会の要請を見据えたものであり意義深い。

### (2) 児童の実態から

図1は、本学級の児童34名の価値的判断力の実態調査の結果である。1学期実施した「全国統一への動き」の単元において、「信長・秀吉・家康の中で、全国統一に一番活躍したのはだれか」を考えさせた。事前の調べ学習で、複数の資料をもとにそれぞれの人物が行った業績について調べさせ、歴



史的にどのような価値があったのかの判断を求めた。調査の結果、34名中24名は、「秀吉は検地や刀狩をすることで、農民の反乱を防いだり、経済を安定させたりすることで、全国統一に貢献した。」などの、複数の資料をもとにした自分の考えをつくることができた。しかし、10名の児童は、「秀吉が天下統一をしたと教科書に書いてあるので、秀吉だと思う。」や「信長が一番はじめに統一事業をはじめたので、信長が一番統一に貢献した。」など、一つの資料からの考え、もしくは判断基準が明確でない考えを書いた。このことから、児童の中には、価値的判断を苦手とする子が少なくないことがわかった。そこで本研究では、収集した事実をもとに社会的事象の仕組みや事実間のつながりの本質をとらえ、その働きについて、自分なりの確かな根拠をもとに価値付けをする力を児童につけさせる必要があると考え、本主題を設定した。

## 2 主題・副主題の意味

### (1) 「価値的判断力を育てる」について

「価値的判断力を育てる」とは、今までの経験や収集した事実をもとに、社会的事象の仕組みや事実間のつながりの本質を多面的・多角的にとらえ、その働きについて、自分なりの確かな根拠をもとに価値付けをする力を育てていくことである。

社会科における「判断」には、「価値的判断」と「実践的判断」の2種類がある。「価値的判断」とは、社会的事象の仕組みを明確にし、その働きについて考えることで価値付けをすることである。「実践的判断」とは、価値的判断をした社会的事象への自分のかかわり方について選択・決定することである。よって、社会の一員として社会的事象に対して公正に「実践的判断」をしていくためには、事前に今までの経験や収集した事実をもとにして、自分なりに根拠をもって社会的事象に対して「価値的判断」をしておかなければならない。

本研究では、社会科における「判断」の中で「価値的判断」に焦点をあてる。歴史学習において社会的事象の仕組みや事実間のつながりの本質を多面的・多角的にとらえ、その働きについて、自分なりの確かな根拠をもとに価値付けをする力を育てておくことで、その後の政治・経済の学習において「実践的判断」をする力を効果的に高めることができると考える。

本研究において、社会科の各観点でのめざす児童の姿は以下の通りである。

- |   |            |
|---|------------|
| ①社会的事象の仕組みや事実間のつながり、働きに関心をもち、進んで資料を収集・選択して調べ、意欲的に課題解決しようとする子ども。 | 【関心・意欲・態度】 |
| ②社会的事象の仕組みや事実間のつながり、働きについて追究し、自分なりに根拠をもって価値付けをしたり、説明をしたりする子ども。  | 【思考・判断・表現】 |
| ③設定した課題について複数の各種資料を収集・選択して調べたり、意見交流をしながら考えを付加・修正したりする子ども。       | 【資料活用の技能】  |
| ④社会的事象の仕組みや事実間のつながり、働きについて、多面的・多角的にとらえながら理解する子ども。               | 【知識・理解】    |

## (2)「立場討論を用いた交流活動」について

「立場討論を用いた交流活動」とは、社会的事象について、社会的背景や自分なりの確かな根拠をもとに価値付けを行い、当事者の視点にたって自分の立場を決定し、友達と考えを伝え合ったり、議論したりしながら考えを比較・付加修正し、深めていく活動のことである。

価値的判断力を育てていくためには、社会的事象の仕組みを明確にし、その働きについて考え、自分なりに根拠をもって価値付けをする必要がある。今までの経験や収集した事実をもとに自分なりに考えをつくることは、社会科学学習において欠かせない活動であるが、個人之力だけで社会的事象について確かな根拠をもとに価値付けを行い、考えを深めていくことは難しい。社会的事象に対して、自分と同じ価値付けを行った友達や違う価値付けを行った友達と考えを伝え合ったり、議論したりしながら考えを比較・付加修正していくことが必要である。立場討論では、社会的事象について自分なりに価値付けを行い、自分の立場を明確にする。その後、立場の同じ友達と考えを伝え合ったり、立場の違う友達と考えを吟味し合ったりすることで、社会的事象の仕組みや事実間のつながりの本質を多面的・多角的にとらえ、その働きについて、新たな視点をもって再度価値付けをすることができると考える。

### 3 研究の目標

第6学年の歴史学習において、社会的事象の仕組みや事実間のつながりの本質を多面的・多角的にとらえ、その働きについて、自分なりの確かな根拠をもとに価値付けをすることができる児童を育てるために、立場討論を用いた交流活動の在り方を究明する。

#### 4 研究の仮説

第6学年の歴史学習において、以下の3視点をもって立場討論を用いた交流活動を行えば、社会的事象の仕組みや事実間のつながりの本質を多面的・多角的にとらえ、その働きについて、自分なりの確かな根拠をもとに価値付けをすることができるであろう。

《視点1》 子どもに価値的判断を迫るような教材化の工夫

《視点2》 価値的判断の場面を効果的に位置づけた単元構成の工夫

《視点3》 交流活動における支援の工夫

#### 5 研究の構想

本仮説に迫るために、以下のような具体的方策に取り組んでいく。

##### (1) 子どもに価値的判断を迫るような教材化の工夫 《視点1》

価値的判断力を育てていくために、以下のような視点から教材化を行う。

- ①本質性：社会科の目標を達成し、社会的事象の仕組みや事実間のつながり、働きについてとらえやすいもの。
- ②多面性：複数の立場や考える観点が存在し、立場や観点の違いで意見交流を行うことができるもの。
- ③関与性：自分たちの生活とのつながりを見出し、児童の知的好奇心を揺さぶって興味・関心・意欲を喚起するもの。

##### (2) 価値的判断の場面を効果的に位置づけた単元構成の工夫 《視点2》

単元構成を「つかむ」「つくる」「ふかめる」「いかす」の4つの段階で設定し、以下のように認識の過程に沿って価値的判断を行わせていくことで、子どもの価値的判断力を育てることができると考える。

段階	内容	認識の過程
つかむ	教材と出会い、学習課題や見通しをもつ。	事実認識
つくる	社会的事象について、視点を明確にしながら資料をもとに調べ、歴史的事実をとらえる。	
ふかめる	社会的事象について自分なりに価値付けを行い、立場討論を用いた交流活動を通して仕組みや事実間のつながり、働きについて明らかにしていく。	関係認識
いかす	社会的事象（仕組みや事実間のつながり、働き）と自分とのかかわりについて考える。	主体認識

##### (3) 交流活動における支援の工夫 《視点3》

立場討論を用いた交流活動を活性化させるため、以下のような支援を行っていく。

###### ①形態

- ・自分の立場や友達の立場を明確にし、討論を円滑に行うための机の配置の工夫。

###### ②交流場面

ア：事前の考えづくりにおいて、同じ立場の友達と話し合いを行うことで考えの強化を行ったり、視野を広げたりすることができるようにする。

イ：交流活動において、意見発表や質疑応答をしていく中で適宜小グループでの話し合いを取り入れることで、自分の考えをあらためて強化したり、相手の考え



## (2) 本單元における単元構成の工夫 《視点2》

段階	内容	認識の過程
つかむ	【川柳～天下もち～】を提示し、意味を予想させるとともに3人の武将について調べていく見通しを持たせる。	事実認識
つくる	それぞれの武将の取り組みについて各種資料をもとに調べ学習をし、歴史的事実をとらえさせる。	
ふかめる	「全国統一に一番活躍したのは誰か」について価値的判断を迫り、自分の立場を決定させる。その後、立場討論を用いた交流活動を通して、社会的事象の仕組みや事実間のつながり、働きについて明らかにし、再度価値的判断を行わせる。	関係認識
いかす	3人の武将の生き方から感じたこと、見習いたいことを考えさせるとともに、次單元への見通しをもたせる。	主体認識

## (3) 本単元の交流活動における支援の工夫

①形態：机の配置を3グループ（信長派・秀吉派等）に分け、立場を明確にした。

### ②交流場面

ア：事前の考えづくりの際に、同じ立場を選んだ友達と自由に意見交流する時間をとり、様々な考えを出せるようにした。

イ：それぞれの立場で代表者を設定し、「他の2人を選ばなかった理由は何か。」を発表させた。また質問・意見を明確に分け、交流がスムーズに進むようにした。

ウ：交流活動の最後に、自分が最初に考えていた【川柳～天下もち～】の意味を振り返らせ、討論をしてあらためてわかったことをもとに再度意味を考えさせた。また、3人の武将の取り組みや関係についてあらためて価値付けを行わせた。

### ③個に応じた支援

ア：資料は年表・図（勢力図・地図）・肖像画等を用意し、自分が読み取りやすい資料をもとに考えをつくらせた。また、読み取りが難しい児童には、年表の中に線を引かせるなどして、視点を明確にして読み取るように助言した。

イ：立場を決められなかったり、考えをつくることができていなかったりする児童には、「すごい・おもしろいと思った資料はどれか。」「大事だと思うことをした武将はだれか。」などの視点を与え、判断をしていけるように支援した。

## 【考察】

○ 事前の考えづくりでは、根拠を明確にして価値判断ができていた児童が55%だったが、討論後に【川柳～天下もち～】の意味を考えさせた際は、76%（26/34人）の児童が複数の資料をもとに、根拠を明確にして考えをつくることができていた。

○ 事前の考えづくりの際に、同じ立場の友達と考えを交流する時間を短時間とったため、少なくとも全員が一つは自分の考えをもって討論に臨むことができた。

● 発言の際に、自分の考えの根拠となる資料を明確にする児童が少なかった。

● 代表者への質問・意見が少なく、代表者の発言をうまくいかしきれていなかった。

● 本時の中では小グループでの話し合いを行わなかったため、意見発表とそれに対する質問・意見だけになってしまい、思考の高まりが感じられなかった。

## 検証 2：単元名「新しい時代の幕明け」

### (1) 本単元における教材化の工夫 《視点1》

- ①本質性：本単元は鎖国下の日本と開国後の日本の様子の違いが明確であり、我が国の社会や生活が近代化したことをとらえやすいため、社会的事象の仕組みや事実間のつながり、働きについてとらえることができる教材である。
- ②多面性：本単元は「日本は開国してよかったのか、鎖国を続けるべきだったか。」を考える際に比較する対象が多くあり、考えをつくったり、立場討論をする上で活発な交流活動を行ったりすることができる教材である。
- ③関与性：時代の大きな転換期の学習であるため、自分の今後の社会参画の在り方について考えることができる。また、今に続く生活スタイルの始まりについても理解できるため、児童の興味・関心・意欲を喚起できる教材である。

### (2) 本単元における単元構成の工夫 《視点2》

段階	内容	認識の過程
つかむ	ペリー来航時の絵図や肖像画を提示し、当時の混乱の様子をとらえ、開国後の日本について調べる見通しをもたせる。	事実認識
つくる	開国後の日本の様子について各種資料をもとに調べ学習を行い、歴史的事実をとらえさせる。	
ふかめる	「日本は本当に開国すべきだったか」について価値的判断を迫り、自分の立場を決定させる。その後、立場討論を用いた交流活動を通して、社会的事象の仕組みや事実間のつながり、働きについて明らかにし、再度価値的判断を行わせる。	関係認識
いかす	開国して日本は近代化したが、不平等条約は今後改正できるのか考えさせるとともに、次単元への見通しをもたせる。	主体認識

### (3) 本単元の交流活動における支援の工夫 《視点3》

- ①形態：机の配置を2つのグループ（開国派・鎖国派）に分け、自分や友達の立場を明確にした。また、グループ内で小グループを形成し、座席を指定して話し合いを行いやすくした。
- ②交流場面  
ア：事前の考えづくりから小グループを形成し、密に話し合いができるようにした。  
また、開国後の日本の様子（近代化・不平等条約の弊害）について学習した上で価値的判断を行い、根拠をもって討論ができるようにした。  
イ：2つの立場それぞれに代表者を設定し、「①自分が選んだ立場のメリット②選ばなかった立場のデメリット」を発表させた。また、今回は代表者に対しての質問・意見を言う時間をとるとともに、質問・意見を明確には分けず、意見を自由に言いやすい形で交流を行った。発言の際には、自分の考えの根拠となる資料を明確にするように助言した。  
ウ：交流活動の最後に、「結局当時の人々は開国を選んだが、それにより日本はどうか、残された問題は何か。」を考えさせ、討論をしてあらためてわかっ

たことをもとに再度日本が開国した意味を考えさせた。また、開国したことに対して、自分なりにあらためて価値付けを行わせた。

### ③個に応じた支援

ア：資料は年表・図（絵図）・グラフ・風刺画・肖像画等を用意し、自分が読み取りやすい資料をもとに考えをつくらせた。考えをつくることのある程度できている児童については、複数の各種資料から考えをたくさんつくるように助言した。風刺画を見てわかることを考えさせ、そこから歴史的事実をとらえることで、読み取りを苦手としている児童でも考えをつくることができるようにした。

イ：前回とは違い、すべての児童が自分の立場をすぐに決めることができたが、判断基準が依然として曖昧な児童もいたため、「グラフから、人々にどのような影響があったと考えられるか。」「開国してよかったことはどういうことで、どの資料からわかるか。」などの視点を与え、判断基準を明確にしたり、考えをつくったりすることができるように支援した。

### 【考察】

- 小グループでの話し合いを設けたことで、苦手意識がある児童も友達の意見を聞くなどしながら、自分の考えを付加・修正することができていた。
- 価値判断する立場が2つということと、事前の考えづくりや討論の際に小グループでの話し合いを設けたことにより、前回よりも活発な意見交流が見られた。
- 討論の振り返りでは、自分の考えを付加・修正したり、友達の意見に納得したりした意見も多く書かれ、交流を通して価値的判断力を伸ばしている児童もいた。
- 質問と意見を分けずに討論を行ったが、友達の発言に対して返答していいのか、しないほうがいいのか迷っている児童がいた。
- 今回は開国後の日本の様子についても事前に学習した上で討論を行ったため、価値判断の基準（どの時代に身を置いて考えるのか）が曖昧になり、今の時代の感覚で話す児童と当時の様子を背景に話す児童がいて、考えが食い違うところがあった。
- すでに出た内容について再度質問したり、意見を言ったりする児童がいた。

### 検証3：単元名「平和で豊かな暮らしをみざして」

#### （1）本単元における教材化の工夫 《視点1》

- ①本質性：本単元は、戦後の日本の政治改革・外交・経済発展とオリンピック開催との関係や日本の復興・発展の様子がとらえやすい。また、政治改革・外交・経済発展の仕組みやつながり、働きをとらえることができる教材である。
- ②多面性：本単元は、戦後日本の取り組みを政治改革・外交・経済発展の3つの面に整理してとらえることができ、それぞれの取り組みの関連を考えたり、立場討論の中で多面的に考えを交流したりすることができる教材である。
- ③関与性：2020年には東京での二度目のオリンピック開催が正式に決定しており、オリンピックがどのような経緯で開催されるに至ったかを調べることは、児童の興味・関心・意欲を喚起しやすい教材である。

## (2) 本單元における單元構成の工夫 《視点2》

段階	内容	認識の過程
つかむ	終戦直後とオリンピック開催時の日本の様子を比較し、日本がどのように復興・発展したのか調べる見通しをもたせる。	事実認識
つくる	日本の復興・発展について、政治改革・外交・経済発展の3面から各種資料をもとに調べ、歴史的事実をとらえさせる。	
ふかめる	「3つの取り組みのうち、オリンピック開催に一番重要な役割を果たしたのはどれか」について価値的判断を迫り、自分の立場を決定させる。その後、立場討論を用いた交流活動を通して、社会的事象の仕組みや事実間のつながり、働きについて明らかにし、再度価値的判断を行わせる。	関係認識
いかす	オリンピックを開催できるほど復興・発展した日本の今後の課題を考えさせるとともに、次單元への見通しをもたせる。	主体認識

## (3) 本単元の交流活動における支援の工夫 《視点3》

①形態：机の配置を3つのグループ（政治改革派・外交派・経済発展派）にわけ、自分や友達の見方を明確にした。また、検証2と同様にグループ内で小グループを形成し、座席を指定して話し合いが行いやすくするとともに、小グループ内での司会者を決め、話し合いが円滑に行えるようにした。

### ②交流場面

ア：事前の考えづくりの時から小グループを形成し、グループの司会者を中心に密に話し合いができるようにした。また、価値判断の基準となる年代を「戦後（1945年）～オリンピック開催年（1964年）」とし、歴史的背景などを踏まえるようにした。

イ：3つの立場それぞれに代表者を設定し、「①自分が選んだ立場のメリット②選ばなかった立場のデメリット」を発表させた。また、今回も代表者に対しての質問・意見を言う時間をとったが、質問・意見を言う時間を明確に分けることとした。そして発言の際には、自分の考えの根拠となる資料を明確にする際に、新たに資料番号をはじめに言う形式をとった。

ウ：交流活動の最後に、戦後日本が行った取り組みの流れがわかる年表を提示し、「戦後、どの取り組みが最初に行われたか。」を可視化し、3つの取り組みの流れと関連をとらえた上で、自分なりにあらためて価値付けを行わせた。

### ③個に応じた支援

ア：資料は年表・図・グラフ・写真等を用意し、自分が読み取りやすい資料をもとにしなが、複数の各種資料から考えをたくさんつくるように助言した。本単元は写真・グラフ等の資料が豊富にあるため、読み取りを苦手としている児童には比較的情報量のすくない資料を見せ、考えをつくらせるようにした。

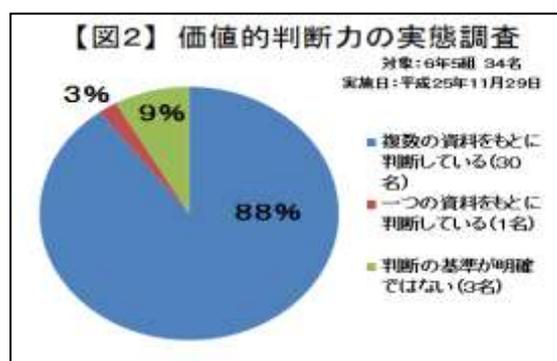
イ：検証1と同様に3つの立場から1つを選ぶ形をとったが、すべての児童が自分の立場をすぐに決めることができた。考えづくりの際に判断基準が曖昧な児童については、同じ小グループの友達と一緒に考えをつくらせることで、根拠を明確にできるように支援した。

## 【考察】

- 司会者を中心に小グループでの話し合いを設けたことで、話し合いを円滑に行うことができ、スムーズに自分の考えを付加・修正することができていた。
- 討論の中で自分の考えを付加・修正し、発言に生かす児童が増えたことで、検証2よりも活発な意見交流が見られ、発言する児童が多かった
- 討論の中での発言や振り返りの中で、複数の各種資料から価値判断をしている児童が多く見られ、交流活動の効果が表れている。
- 資料番号を明確にして発言することや価値判断の基準を共通理解したことで、根拠のある意見交流ができた。
- 依然として、発言の中で質問と意見が曖昧になっている児童がいるため、意見交流のしかたについては今後も積み上げていかなければならない。

## 8 研究の成果と課題

検証3の単元の最後に、3つの取り組みの中で「オリンピック開催において一番重要だと改めて思うものはどれか。その理由は？」といった問いで改めて価値付けさせた際、複数の資料をもとに自分なりに価値付けをすることができた児童は88%、一つの資料をもとに判断している児童が3%、判断基準が明確でない児童が9%いた。(図2)



複数の各種資料から価値的判断を行い、社会的事象の仕組みや事実間のつながり、働きについて、多面的・多角的にとらえることができる児童が増えたといえる。

### (1) 研究の成果

- 本質性・多面性・関与性の視点から教材化を行ったことで、進んで資料を収集・選択して調べたり、意欲的に課題解決しようとしたりする児童の姿が見られた。
- 単元の中で効果的なタイミングで価値的判断を迫る場面を設定したり、個に応じて複数の各種資料を提示したりするなどの支援を行ったことで、自分の考えに根拠をもたせることができた。
- 立場討論を用いた交流活動で、小グループによる事前の考えづくりや話し合い、討論後の振り返りなどを繰り返し行ったことで、自分の考えを付加・修正したり、自分なりの価値付けができるようになったりした児童が多かった。小グループでの話し合いは、自分なりの価値付けの力を高める上で有効であったといえる。

### (2) 研究の課題

- 討論中の質問・意見のしかた、返答のしかた（討論の流れの工夫・モデルの提示）
- 自分の力で価値付けできる能力の育成（繰り返し価値付けする場の提供）

## <参考文献>

- ・文部科学省 平成20年8月『小学校学習指導要領解説 社会科編』 東洋館出版社
- ・森分 孝治他 編 平成12年4月 『社会科重要用語300の基礎知識』 明治図書
- ・大森 照夫他 平成12年2月 『新訂 社会科教育指導用語辞典』 教育出版